

原著

いのち
生命の大切さを伝える教授方法
—母子健康手帳を活用して—

吉井 珠代*

An Educational Method of Teaching the Importance of Life
— Focus on the Practical Use of Handbook Certifying Implementation of Maternal
and Child Health Measures. —

Tamayo Yoshii

世界で最も長寿国となった日本は、同時に、世界で最も乳幼児が死なない国でもある。この事実の長期化が、多くの国民、とくに若年者に生命の大切さを意識させなくなった一因といっても過言ではない。

そのため筆者は、学生が「乳幼児の生命を守る」という保育者の責務を理解する過程において、実態として理解しにくい“生命の大切さを教授する”手段に、学生自身の成長・発達の記録である母子健康手帳を用いることを試みた。

その結果、約4割の学生に、今、自分がこの世に元気に存在することに対して、親や家族に感謝の気持ちを抱くとともに、生命の大切さや保育学生としての自覚が芽生えるという効果が得られた。しかし、一方には、それを上回る割合の理解力、想像力や専門知識の乏しい学生が存在するという課題も見えてきた。

Key words: 母子健康手帳、想像力、保護者との会話、感謝の気持ち、授業態度、専門知識の乏しさ、保育者の責務

はじめに

筆者は本年度、対人援助職、とりわけ乳幼児の成長発達に深く関わる保育士、幼稚園教諭を目指す学生（保育学科学生）に「小児保健」を担当することになった。保育者養成課程に在籍する学生への授業は、前任校で担当して以来6年ぶりである。今回の小児保健は、筆者にとって科目自体は初めてである（前任校では、乳児保育と看護学を数年間担当した）が、授業を通して学生たちに、職業上の対象者である乳幼児の「生命の大切さを理解した上で、その生命を守る行動がとれるようになってほしい」という授業のねらいは共通しているため、過去と現在において自分が行った（行っている）授業の効果を確認する機会にもなった。

本稿は、小児保健（保育学科学生の一年生対象）

の授業において、“生命の大切さを理解させる”という授業のねらいを実現させる方法として、母子健康手帳（以下、母子手帳と記す）を教材に用いることとし、受講生に授業のねらいが実現したか、その効果を探るとともに、よりよい教授方法について考察するものである。

第1章 生命の大切さを伝える教授方法

1) 子どもが健康に生まれ、育つということの重要性を伝える

現在、わが国では、母子保健水準の指標とされる乳児死亡（出生千対乳児死亡率で観察する）は、世界で最も低率（スウェーデン、シンガポールも統計年度は若干異なるもののほぼ同率）である。そもそも乳児の生存は、母体の健康状態や養育条件などの影響を強く受けるため、乳児死亡の動向

* 四條畷学園短期大学 介護福祉学科

は、その地域の衛生状態や経済、教育を含む社会状態を反映する指標の1つと考えられ、観察されてきた¹⁾。日本における乳児死亡が急激に改善されたのは第二次世界大戦以降で、国民の平均寿命が急速に伸びた時期に重なる。とくに、学生たちが生まれた時期である平成以降は出生千対5以下で推移しており¹⁾、“出生した子どものほぼ全員が成長発達するのが当たり前”という時代になっている。こういう現状が20年以上にわたって持続していることが、多くの国民に、とくに若年者に生命の大切さ・尊さ、健康に育つことの幸せ、ありがたさを意識させなくなった一つの原因だと筆者は考えている。

したがって今回の研究対象とする授業では、出生した子どものほぼ全員が成長発達して世界で一番長生きするということが、簡単に享受できているものではなく、医学と公衆衛生の発達によって成し得た事柄であること、そして何より母親を中心とした養育環境の改善（保育者による養育環境も含む）が強く影響して得られた賜物であることを認識し、感謝の念をもたせることを目的とした。さらに自分自身の母子手帳に書かれた保護者（主に母親）の記入事項を知る事によって、保育者の立場で保護者のわが子への願いや思いを知る機会になれば「乳幼児の生命を守る」という保育者の自覚を高める一助になることも期待した。

2) 母子健康手帳を教材に用いる必要性と授業の実際

かつて高率だった日本の乳児死亡が急激に改善した要因は、1965（昭和40）年に制定された「母子保健法」と、この法律において妊娠を届出た全数に交付され活用されてきた「母子健康手帳」の育児書的機能・効果を含む、母子保健行政の推進によるところが大きい²⁾といわれる。母子手帳は、妊娠初期から子どもが小学校に入学する前までの期間の母と子の一貫した健康記録であり、保育者養成課程の学生にこそ活用させたいもの^{*1)}である。

当然、母子手帳は、重要な成長発達の記録や養育環境などが推察可能な情報の宝庫であるとともに他者に知られたくない性質の個人情報も多く記録されているため、その扱いには細心の注意が必要である。そのため筆者は、受講生全員に「母子手帳は個人情報満載の大切な記録であるため、保

護者の了解を得て、学校へ持参すること」を条件とし、持参した後も「むやみに人に見せないで、自分自身で大切に扱い勉強すること」という説明を、自宅から持参させる前、当日の授業の開始時、授業中、終了時に幾度も伝え注意喚起させた。さらに授業中の手帳の記録内容に関する学生の質問には、机間巡視してその学生の所に赴き、丁寧に答えるよう努めた。このようにして、今回、小児保健で母子手帳を用いる授業を2回実施した。1回目は、10月20日（1時限目；4、5、6組。3時限目；1、2、3組）で、2回目は、10月27日（同）である。

当日は、多くの学生が母子手帳を持参できていたが、紛失や自宅に忘れてきたなどの理由で持参できなかった学生たち（忘れた学生数は、1、3時限とも同じ傾向で、1回目の授業では7、8人、2回目の授業では5、6人）には、持参できた学生の母子手帳を覗き込むことができないように、教室の一箇所に席を移動させ、筆者が学習用見本のために用意した6冊の未記入の母子手帳を貸して、各々の頁に記入されている内容を学習させるという方法で対処した。

授業では、まず、母子手帳にはどのような記録・内容（表1）が記入されているのかの説明と母子手帳が果たしてきた功績についての説明をしたうえで、1回目の授業では主に「母親の妊娠時～出生時の記録の見方」を、2回目の授業では「乳幼児時の成長発達の記録と予防接種の記録の見方」を説明した。両日の学生の反応は、母子手帳を持参している者は自分の母子手帳に見入り、挙手をして筆者の説明を求めるものが10人程度いたうえ、眠ったり、私語をするものがいなかったため、かなり興味・関心があったものと推察できた。

また、この2回の授業終了後には、全受講生に、自宅で自分の母子手帳をしっかりと見て、自分の成長発達の記録の確認をして感想を書かせるというレポートの提出を求めた。これは、授業中手帳を持参しなかった学生（何らかの理由で持参出来なかった者も含む）も、レポート作成のためには自分の母子手帳を見なければならぬし、母子手帳の記録内容が理解できない場合は、保護者（主に母親）に尋ねて記入するような質問項目を設定したので、“親子の会話の機会”になることをねらいとしたものである。

※ 1

筆者は、前任校において母子健康手帳を使って5年連続（乳児保育で1年、看護学で2年、保健看護学で2年）で「生命の大切さを伝える授業」を実施した後、宿題として提出させた感想文の結果（小児の発達を理解できたやこの世に生を受け無事育っている事に対して母親への感謝が述べられていた。など）から、ある程度授業のねらいが達成できていることを確認してきた。さらにその科目の全授業終了時に、最も印象に残った授業内容をアンケートで尋ねると、いずれの学年も65～70%の学生が、“母子健康手帳を使った授業”と答えており、その効果を実感していた。

【表1.】母子健康手帳の主な内容

1. 妊婦の職業と環境、健康状態など
2. 妊娠中の経過
3. 出産の状態と産後の経過
4. 妊娠中と産後の体重変化、歯の状態
5. 母親学級（両親学級）の受講記録
6. 保護者の記録；生後1～4週間までの状態と健康診査など
7. 保護者の記録；1か月頃、1か月健康診査など
8. 保護者の記録；3～4か月頃、3～4か月健康診査など
9. 保護者の記録；1歳の頃、1歳健康診査など
10. 保護者の記録；1歳6か月の頃、1歳6か月健康診査など
11. 保護者の記録；3歳の頃、3歳健康診査など
12. 保護者の記録；5～6歳の頃、
13. 乳幼児身体発育曲線
14. 幼児の身長体重曲線
15. 予防接種の記録
16. 歯の健康診査と保健指導 など

第2章 受講後のレポートによる学生の反応

前述したように、2回の授業を実施した後、自宅にて入念に母子手帳を読み返すための機会としてレポートを課した。質問は、次の5項目であり、記入時必要な場合は保護者（母親）に尋ねて書くよう促しておいた。

- ① 母子手帳に記入されている内容について
- ② 母親の妊娠中の経過と出産の様子を見た感想
- ③ 保護者の記録（出生後の成長発達の様子）を見た感想
- ④ 自分が受けていた予防接種について
- ⑤ 母子手帳を読んだ感想（とくに保護者と話し合った場合はその内容について）

このレポートは、授業時に持参しなかった学生も、母子手帳を見なければ記入できないものであるため、より多くの学生に自分の成長の軌跡を確認させる意味（自習）もあった。また、親元を離れ一人暮らしをしている学生も、連休には帰省する可能性が高いと考え、レポートの回収は連休明けの平成20年11月10日とした。

その結果、提出期限どおりに回収できた者は80人で、その後、回収当日の欠席者や遅れて提出する者もあり、合計84枚回収した。そして、回収できたレポートを、本研究の効果測定に使用することとした。ちなみに記入用紙は、2回目授業の終了時に当日の出席者全員に88枚配布したので、回収率は95.5%であった。

【回収したレポートによる学生の反応】

- ① 「母子手帳にはどのような内容が記録されているか」について

これは、母子手帳を見れば記入できる項目であるが、真面目に母子手帳を見てレポート記入したと判断できた者は40名で、各項目を詳しく記入できていた。

逆に、記入内容が極端に少なく母子手帳を開いたかどうか判断できない者が18名であった。

- ② 「あなたを妊娠中のお母様の経過と出産時状態を記入した頁を読んだ感想」について

真剣に、母親が自分を妊娠中の経過や出産時の様子を知りたいと思った者は母親と何らかの形で会話していて、尋ねた内容が記入されていた者は28名であった。また、保護者に尋ねてはいないが母子手帳に記入されている母親の受診経過の記録を丁寧に丸写しした者が2名いた。

一方、「順調でした」とこともなげな表現で、妊婦（母親）が抱く胎児成長への期待感や妊娠後期の不安や身体的負担を想像しながら慮ることがで

きていないと考えざるを得ない学生が31名であり、関心のない者が多かった。

③「出生後のあなたの成長・発達の記録と保護者の記述内容の頁を読んだ感想」について

母子手帳の保護者の記録の頁（表1中の6.～12.）に書かれている保護者の記述内容（ほとんど母親が記入）について母親と会話した者や、頁毎の記述文字量の多い少ないを他の兄弟姉妹の手帳と見比べている者や、自分自身の成長・発達の経過を自分が本学に入学して得た保育知識に照らしながら真剣に読んでいる者は36名であった。

逆に、前述した②同様に、「順調でした」と一言で片付けてしまっている者が21名であった。

④「あなたはどの予防接種を受けていましたか」について

これも、母子手帳の頁を見れば記入できる項目であるため、真面目に見てレポート記入したと判断できた者は45名で、各自接種された項目を詳しく記入できていた。この項目は、特に直前の感染症予防の授業で、学生たちが乳幼児の頃とちがって、その後の状況変化により予防接種法が改正され、麻疹が2回接種となったことやツベルクリン反応を省略してBCG接種を行うことになったことなどを説明したばかりであったが、そのような状況の変化を考えながら自分の記録を読めたものはわずか5名にすぎなかった。

また、この項目にも記入内容が極端に少なく母子手帳を開いたかどうか判断できない者が20名いた。

⑤「母子手帳を読んだ感想（とくに保護者と話し合った場合はその内容について）」について

この質問項目は、レポートに真面目に取り組んだ者は、母子手帳の保護者の記入内容について、母親に尋ねながら会話し、何らかの感謝の言葉が書かれるであろうと考えていたため、筆者が最も注目した項目である。結果、母親に自分を妊娠中の経過や出産時の様子、その後の成長・発達の様子について尋ねて、丁寧に感想や話し合った事柄を記入した者は38名であった。

また、この項目に保護者と会話した記載は無いが、自分自身の成長の記録である母子手帳を熱心

に見て、正直な感想を書いている者が17名いた。

一方、「順調だった」や、母親と会話したであろうと思われるのに「特に苦勞せず大きくなったそうです」など、一語だけや一行だけという記入量の極端に少ない者が19名おり、中には、「お母さんがたくさん記入しているのでびっくりした」という表現だけで、母親への感謝の気もちが書けていないものもあった。

第3章 考察とまとめ

提出された84枚のレポートを、次の3グループに分けてさらに詳しく分析していくことにした。

「A；母子手帳を見て、保護者と会話しながら記入したグループ」46名^{※2}（全体の54.8%）、

「B；母子手帳を見て記入してはいるが、保護者には尋ねなかったグループ」24名（同24.5%）、

「C；母子手帳を見た形跡なく、真面目にとりくんだとは思えないグループ」14名^{※3}（同16.7%）、であるが、次のような課題が浮かび上がってきた。

※2

前章で述べた、5つのレポート質問項目のいずれかにおいて保護者との会話が確かめられた者をAグループとしてカウントした。

※3

上記同様、5つのレポート質問項目のいずれにおいても母子手帳を見た判断できなかった者をCグループとしてカウントした。

Aグループは、筆者の授業のねらいの一つである“保護者との会話の機会になる、”という目標を達成できたグループであるといえる。

Aグループの学生の感想を見ていくと「親の愛情を感じた」、「自分を育てるために、急な病気やアレルギーで病院通いなど苦勞や心配をかけてきた」、「帝王切開出産や陣痛が長引いたなど大変な状況を知って生んでくれた事を感謝した」、「母親が成長の記録を沢山記入してくれて嬉しかった。自分の子どもが生まれたら、同じようにしっかりと記入しようと思った」、「無事に育って母親・父親や祖父母が喜んでくれている」、「学校で学んだとおりに大きくなっていて、専門知識の理解が深まった」、「母親が懐かしがってあれこれ話してく

れ、自分の知らない多くの出来事を知り感謝した」、「母親だけでなく、父親とも会話して、両親に感謝した」といった内容であった。したがって、Aグループで筆者が“生命の大切さを伝える事ができた”であろうと判断できた学生は30名、65.2%（回収枚数全体の35.7%）であった。

Aグループの分析で、筆者が最も注目したのは、保護者と会話していながら、「順調だったそうです」、「特に苦勞せず大きくなったそうです」、「お母さんがたくさん記入しているのでびっくりした」など、ごく簡単に記入しているに過ぎない者が8名いたことである。この学生たちは、母子手帳を見ながら保護者と会話して、育児の大変さや子どもの成長を願う親の気持ちなど多くの事柄を聞いたであろうに、その理解が乏しいと推察するしか考えられない記述内容であったことである。

そうかといえば、保護者との会話にはつながらなかったが、母子手帳を自己学習したBグループにも、4名とわずかではあるが、「母親の出産や育児の大変さを理解して感謝している」、「乳幼児身体発育曲線に照らして、自分自身の発達の経過がどのレベルであったかについて言及している」、「自分が受けた予防接種の接種回数の少なさ（当時の基準）を心配している」や「母子手帳が持ち出し禁止だったので授業中の説明を参考に自宅でしっかり読んだ。若い母親が幼い字で記入している事や自分をここまで育て上げてくれたことに感謝し、母親を尊敬した」という感想があった。その学生たちには、母子手帳の記入者である母親の立場になって思いやる感性や未経験の妊娠・育児などに対する想像力および知識に照らして理解する力などが備わっていて、筆者の授業のねらいが伝わった者と判断できた。

したがって、本稿の主目的である、“母子健康手帳を使った授業で、生命の大切さを伝える事ができた”と判断できた学生は、Aグループの30名とBグループの4名の合計34名であり、レポート回収できた学生全体の40.5%であったと結論できる。しかし、本稿の冒頭部分に述べたように、筆者は前任校（本学と同じ保育者養成の女子短大）において、同様の質問項目の感想文を約十年前から5年連続で回収・分析していて、その文章量、記述内容から判断して約6割の学生に筆者の意図が伝わったと実感していたのであるが、今回の結果は

予想外の低さとなった。

一方、この数字と逆の判断をした、いわゆる“母子健康手帳を使った授業で、生命の大切さを伝える事ができなかった”学生たちのことも今後の重要な課題として認識しておく必要がある。3つのグループで同じように見ていくと、その数はAグループの前述した8名とBグループの20名に加え、Cグループの14名の合計42名であり、実に50%という高い率（この中には、母子手帳が紛失その他で手元になかったり、宿題を手抜きしただけだったりなど、単に授業のねらいが伝わらなかった学生たちと片付けられない要素が含まれている）になった。

このことから、筆者自身の教授方法、とくに学びを集約させる過程において、保護者との会話や保護者の思いを慮ることなどを引き出せるような質問項目を工夫する必要があったと反省した。

おわりに

今回、筆者が担当した「小児保健」は、保育士資格の必須科目（授業形態；講義）であるため、本稿の試みのように演習系の内容を取り入れることに疑問を感じる意見もあるかと思う。また、今回の効果測定において多分に筆者の主観的評価があったことは否めない事実であるが、今回の結果から導き出された約5割の学生の、相手を思いやる気もちや感謝の気もち、読解力、想像力などの乏しさは、保育者として「乳幼児の生命を守る」という責務を果たせるかどうかに影響する“保育知識の乏しさ”にも共通する事象であり、看過できない性質の課題である。

日常的には、現在の学生の大半が授業中の教科書に書かれていることの教員の補足説明などについても口述筆記できないことから、板書の必要性が多くなりかなりの時間を使うので、教科書に書かれた内容以外の追加説明を少なくせざるを得ない場合が多い。こういう現状からも、担当者は授業時間のすべてを講義に費やすだけでは学生の理解が得られにくく、適宜演習も取り入れる授業計画が求められていると考える。

実際に、今回の母子手帳を用いた“生命の大切さを伝える”2回の演習授業は、学生の授業態度

も良好であり、ある程度の効果を得ることができたといえる。そういう意味において、自分自身の成長・発達の記録である母子健康手帳は、学生の興味・関心を引き出すのに十分⁴⁾であり、活用できる教材であった。

(参考文献)

- 1) 厚生省の指標「国民衛生の動向」厚生統計協会
2007.10.
- 2) 西尾祐吾編 拙著(共同執筆)「児童福祉論」晃洋書房 2005.4.
- 3) 木村好秀、齋藤益子著 第2版「家族計画指導の実際」医学書院 2007.6.
- 4) 小西美智子監修 津島ひろ江編著「記録に基づいた保健指導」中央法規 2004.3.

－ 2009. 3. 28 受稿、2009. 3. 30 受理－